

『法華経』の実践とチャイトヤ建立によって、その場に如来の全身が実現されるため、仏舍利を納めたストウパーの建立は不要であり、むしろ、『法華経』実践の場に建立されたチャイトヤこそが真のストウパーであると主張している。そこには、「ストウパーブツダ」という伝統的仏塔信仰の基本理解を踏襲した上で、価値の中心を『法華経』の実践へとシフトさせようとする意図が看取され、ここにわれわれは、『法華経』の実践+チャイトヤ建立=真のストウパー建立=如来の実現」という『法華経』のブツダ観・仏塔観を確認することができる。さらに興味深い点は、実現される如来がそれまでは三人称視点で漠然と表示されていたのに対し、「分別功德品」においては一人称視点で「私」（=話者である積尊）と記され、『法華経』の実践とチャイトヤ建立を通して実現し感得される如来が、他ならぬ積尊その人であることが表明されていることである。

『法華経』はブツダ観の展開上、それまで広く認められていた「永遠のブツダ」という観念を、歴史的存在である積尊に重ね合わせることによって、積尊を歴史的限定から解放して永遠性を付与するとともに、説法場に顕現されるブツダに歴史性を与える役割を果たしたとされるが、当の「如来寿量品」自体は「永遠の積尊」を感得する方法の具体的記述を欠いていた。

一方、「如来寿量品」の直後に位置する「分別功德品」は、「如来寿量品」の教説を引き継ぐものであることを自認するとともに、実現される如来が積尊自身であることを示している。これらを総合すると、『法華経』において積尊の永遠の現存は、『法華経』の実践とチャイトヤ建立によって感得される」との

結論が導かれる。『法華経』が実践され、その場にチャイトヤが建立される限り、積尊は時間的・空間的限定から解放たれて常に説法場に顕現し、衆生はその永遠の現存をいつでも感得することができる。『法華経』においては、『法華経』の実践と「チャイトヤ建立」は不可分に結びつきながら、永遠の積尊を感得するための手段、方法ともなっていたのである。

### 『大毘婆沙論』成立の諸問題

三友 健 容

漢訳された『婆沙論』には三種類ある。『鞞婆沙論』（十四卷二百卷である。三訳の対応関係について(A)十四卷『鞞婆沙論』は六十卷『毘婆沙論』『大毘婆沙論』の要約である。(B)独立した『毘婆沙論』であるという意見に別れ、その成立の先後関係についても未だ定説を見ていない。

六十卷『毘婆沙論』と『大毘婆沙論』は「五百羅漢」の「釈」「造」とあるから、五百羅漢の解釈であり、『鞞婆沙論』には帰敬偈と「尸陀槃尼撰」とあり、最初にあるべき膨大な量の「雑健度」が省略され、「結使健度」の「四十二章十門」からはじまっているから、「四十二章十門」の根本論の「収録流通本」であるという見方が妥当であり、『鞞婆沙論』はそれら『婆沙論』から撰じたものということにならう。しかし重要なこと

## 第9部会

は、『鞞婆沙論』は六十卷『毘婆沙論』や『大毘婆沙論』の系統の『婆沙論』から撰じたのではないということである。一例をあげると色処の説明のときに『鞞婆沙論』は可見法の説明に妙音と世友の意見を紹介し、六十卷『毘婆沙論』では妙音説はなく、その代わりに覚天とアビダルマ論師説を紹介している。

一方、龍樹の『大智度論』には声聞のひとつでアビダルマの論議に従うものを毘婆沙というところとあり、とくに説一切有部系統のアビダルマ論師は毘婆沙師と呼ばれていたという事実があり、『鞞婆沙論』の序からも複数の『婆沙論』が存在したことがわかる。

六十卷『毘婆沙論』が「戦乱によって百巻のうち四十巻が失われたのではなく、『毘婆沙論』は意図的に『大毘婆沙論』の十門章の説明と大天問題を無視した」という仮定は成立しないし、十四卷『鞞婆沙論』はこの六十卷『毘婆沙論』系統からの抄本であるとはいえない。なぜならば六十卷『毘婆沙論』はもともと解釈する予定であった八捷度のうちの業捷度以降を欠いているから、これは焼失した四十巻にあったと見るべきである。

百巻『毘婆沙論』にしても、二百巻『大毘婆沙論』にしても、これほど大容量の『婆沙論』が編纂できるのは、五百人の阿羅漢を集めるほどの編集会議でないとできないだろう。大正蔵経の頁数より類推して、『大毘婆沙論』は百巻『毘婆沙論』のわずかに一・二・三五倍であるから、この説を採用すれば、『大毘婆沙論』からの要約版が百巻『毘婆沙論』であると見なくとも良いことになる。すなわち、五百羅漢による『八捷度論』の註

釈はもともと百巻程度のものであり、意見の一致を見ない者は、この『婆沙論』の原型をもとに修正補説したのであって、複数の『婆沙論』があったと考えられる。そして、次第に増補されて異説を統合した結果、一・三五倍の『大毘婆沙論』となったのであり、『大智度論』には現在の『大毘婆沙論』に扱われている大天問題や小善成佛問題など重要な課題に触れていないから、『大智度論』のころには大天問題や小善成佛問題の論じられていない『大毘婆沙論』系統の『婆沙論』、あるいは『大毘婆沙論』原型が出来上がっていたと考えられる。

しかも『大智度論』が引用する有部説は現在の『大毘婆沙論』に一致し、六十卷『毘婆沙論』とは一致しないから、この部分が羅什の増補でないかぎり、『大智度論』すなわち龍樹（紀元百五十一―二百五十年）の時代ごろには『大毘婆沙論』系統の『婆沙論』、あるいは『大毘婆沙論』の原型版があったということになる。

## 『阿毘曇心論』業品における

## 三障の軽重について

智 谷 公 和

この論題に対する『阿毘曇心論』(Abhidharma-hridaya-sāstra, 大正蔵経 No. 1550, 以下『心論』と略す)業品(Karma-nirdesa)における業障の軽重が説かれている偈と長